企業の力になる日商簿記

広告

経営がよくなる秘密は財務諸表にあり

日本税理士会連合会
会長
神津　信一　さん

Profile 神津信一　Shinichi Kozu
1949年、東京都生まれ。香村正雄公認会計士事務所勤務を経て1980年、税理士登録。1980年、神津信一税理士事務所開設。2010年、KMG税理士法人設立。2011年、東京税理士会会長。2015年、日本税理士会連合会会長。

実践から身につけた簿記の知識

――簿記との出会いはいつ頃ですか?

若い頃、アルバイトとして数人でやっている税理士事務所で働きました。入ってすぐに先輩が辞めて、所長から「この会社の決算をお願いします」と書類を渡されたのです。当時の私は簿記を知らなかったので決算書の作り方がわからず、妻がある企業で経理の仕事をしていたので相談しました。その時、妻から「一つ一つの取引について、これは『借方』か『貸方』かと考えずに、現金収入や売掛金など『嬉しいもの』が増えたら左(借方)、借入金など『悲しいもの』が増えたら右(貸方)に記入すればいい」と言われて「なるほど」と思い、仕事を進めることができたのです。

パソコンも電卓も無い時代のこと、長い試算表の用紙に算盤で計算した数字を埋めていくと、最後に左右(借方と貸方)の数字が一致することや、貸借対照表と損益計算書の当期利益が一致することが面白くて、仕事をするのが楽しくなりました。その後、他の仕事も任され、実務の経験を積み重ねて、数年後に税理士試験を受ける頃には、簿記論が得意科目になっていました。

会社経営の基本は財務諸表

世間では税理士のイメージが必ずしも伝わっていないのですが、お客様である企業の事務を代行するだけが仕事ではありません。活動の範囲が非常に広く、いろいろな場面で活躍ができて面白い、ということを多くの方に知っていただきたいですね。経営者のパートナー、あるいはコンサルタントとして、大手企業の合併買収に携わったり、中小企業の社長と経営改善に取り組むなど、掘り起こせば仕事はいくらでもあります。

税理士は社長さんと二人三脚で会社を成長させたいと願って仕事をしています。「経営がよくなる秘密」は財務諸表にある、つまり、会社の基本は財務諸表にあって、経営者がそれを読めないでいいわけはありません。ある上場企業では全社員に日商簿記3級を義務付けていて、営業部門の社員は「この会社と取引していいかどうか」をその会社の財務諸表によって確認し、また、製造部門の社員はコストに対する意識を強く持つなど、経理だけでなく、すべての部門で、簿記の知識が会社の成績向上に役立っていると聞き、なるほどと思いました。

ところが、社長さんの中には、税理士が、去年の貸借対照表や損益計算書と比較したり、人件費の比率について説明しようとしても、「俺は数字のことを聞いてもわからないから」と、話を聞こうとしない方がいます。部下に任せているのかもしれませんが、経営者が財務諸表に関心を持たないようでは会社の経営はよくなりません。税理士と連携しながら、社長自身が自社の財務諸表を読んで、過去の数字や同業他社と比較することを意識している会社は成長していきます。

決算書のポイントは当期利益と現預金の増減

社会人にとって、簿記の知識を役立てる具体的な方法を一つあげるとすれば、決算書のうち当期の利益と、キャッシュフロー計算書の末尾にある現預金の増減結果に注目し、前期の数字と比べたり、同業他社の数字と比べて分析することです。経営者であれば、自社の決算書を見て、「前期と比べて利益は増加しているが現預金は減少している」と判明したら、なぜそうなっているか、理由を考えることが、これから先の経営をどうするか、の出発点になります。会社員であれば、自分の仕事が勤務先の企業にとってどのような意味を持つかが見えてきて、やる気のアップにつながります。

商工会議所検定試験

簿記は、企業の活動を適切かつ正確に情報公開するとともに、経営管理能力を身につけるため必須の知識です。社員一人一人が、経営活動を記録・計算・整理して、経営成績と財政状態を明らかにする簿記スキルの習得は、企業力の強化につながります。商工会議所では、経営支援の一環として、企業現場で求められる実践的な人材を育成するとともに、そのスキルを評価・認定する検定試験を実施しています。日商簿記検定は、1954年の開始以来、累計約2500万人が受験しており、時代を問わず多くの企業が社員に求める資格の上位に位置しています。この度は社会人にとっての簿記の重要性や活かし方について、教育と実務の観点から有識者2人にお話を聞きました。

仕事の意味は簿記でわかる

中央大学名誉教授
渡部　裕亘　さん

Profile 渡部裕亘　Yasunobu Watabe
1938年、福島県生まれ。1960年、中央大学商学部卒。大学4年次に公認会計士試験に合格。中央大学助手、専任講師、助教授を経て、1977年教授、2008年名誉教授。中央大学経理研究所元所長。『簿記演習一勘定科目論一』『簿記と仕訳』など著書多数。

学問への道を開いた恩師のひとこと

――簿記会計の学問の道を一筋に進んでこられた印象があります。

中学校を卒業し、家業を継ぐつもりで商業高校に進学しました。当時、商業高校では簿記と算盤が特に重要だと思い、この二つに力を注いだ結果、一年生で簿記1級に合格し、算盤も県大会に出場しました。

日本に公認会計士の制度が誕生して間もない頃で、簿記の先生から「これからの時代は会計士が重要な役割を果たす」と言われたのです。このひとことがきっかけで大学に進学することになり、商学部に入って公認会計士を目指し、私を含む高校の同級生が3人、公認会計士になりました。

大学4年生の時に公認会計士試験に合格したのですが、その時は、弁護士を目指して法学部に学士入学しようと考え、ゼミの先生に相談しました。先生からは「今までせっかく勉強したのだから、大学に残って会計の勉強をしないか」と言われ、大学院で学び学校に残ることになったのです。決して最初から学者になろうと思っていたわけではないんです(笑)。

仕訳に始まり仕訳に終わる

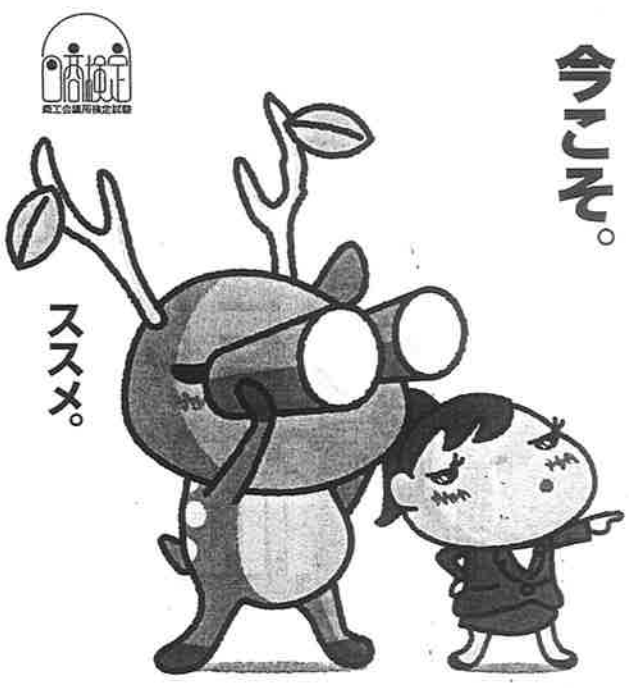
――簿記を学ぶと、企業実務でどのように役立ちますか?

簿記の特徴は「取引は借方と貸方の二つの面を持っている」「借方と貸方の金額は必ず一致する」ことに集約されます。そのため、私はよく「簿記は仕訳に始まり仕訳に終わる」と言っています。仕訳ができるようになれば、あとはルールにしたがって貸借対照表や損益計算書をつくるだけです。

あらゆる経済活動は数字で表されて、仕訳により借方と貸方の二つの面で表すことによって、その内容が明らかになります。つまり、簿記を学ぶことで経済の本質を知ることができる、こうした点に私は魅力を感じました。

簿記や会計は現代社会で生きるうえで必須の知識です。決して経理部門で働く人だけのものではありません。自分の勤務先や顧客企業など、企業の経営状態は数字に集約されるので、簿記で学んだ知識を活かして、企業の現状を全体的につかむことができます。その結果、勤務先での自分の仕事の方向性も把握できて、いまやっている仕事にどのような意味があるのかがわかって、意欲が向上し、キャリアアップにつながるのだと思います。

学んで活かそう



地力をつけて、ビジネスに活力を。

社員の能力を高め、経営力をアップしませんか?

商工会議所の資格が証明します

企業が求める資格、第1位※

世界で通用するビジネススキル

日商簿記

2月試験 全国の商工会議所で申込受付中

次回試験日:〔2級～4級〕2016年2月28日(日)

※リクルートエージェントのホームページ「企業が求める資格ランキングトップ10」から引用

7,000万人*の受験実績を誇る産業界の信頼ブランド

商工会議所検定

商工会議所が実施する検定試験は、全国統一の基準の下で、年間約74万人(2014年度実績)の方々が挑む大規模なもの。年齢や業種を問わず幅広い受験者層の方々が、実社会で活躍するため、また、就職力を高めるためにチャレンジしています。※昭和19年からの累計受験者数

お問い合わせは　日商簿記　検索　http://www.kentei.ne.jp　情報ダイヤル 03-5777-8600 受付時間 8:00～22:00(年中無休)